

The heir of Fortune

Story by

せりざわ ゆうき

夏の休暇が目の前だった

。

銀河帝国の首都星オーディンにある、銀河帝国軍直属の幼年学校では、年に三回ある休みの中でも一番長く、自由度の高い夏の休暇を控えて、少年達が様々な計画を練るのに忙しかった。

他の星系にある系列の幼年学校とは違い、ここオーディンの軍幼年学校は、あらゆる意味で特例に満ちた不思議な制度を採用していた。というのも在籍者には帝室とながりの深い大貴族の子弟が多く、またそれらが必要に応じて連れてくる世話係といった下の身分から選ばれた学生もがいるために、すべてを同一扱いしかねるからである。

また、カリキュラムが大きくは二部に分けられ、最初の二年は教養科と呼ばれる。社交術やダンスを含む一般教養ともいべきものと、体力作りのためのトレーニングと定められている。入学する年齢になるまでは、まったくの一般校に通っていたもの、または家庭教師によってみつしりであるいは漫然と、階級にあつた学問を聞かされていただけの者たちにとって、全員が等しく寮に入り、規律正しい生活を送ること自体が、初体験の連続なのである。

甘やかしてくれる乳母が恋しくて泣く者、出身家庭の身分をひけらかし自分より劣るものに威張り散らす者、日に三度供される食事に不満たらたならな者。学校と寮とは階級社会にありがちな複雑さが満ちあふれていた。

やがて、まがりなりにも他者への配慮や、協力といったことを学んで三学年に進級すると、そこには寮生たちにとつてまたがらりと変わった、まったく新しい世界が彼らを待ち受けている。予科と呼ばれるこの課程は、文字通り彼らを未来の士官の卵として育て上げるために用意されているのだ。

カリキュラムが単位取得制になり、三年から五年生までがまぜこぜに一つのコマに臨むことになる。年齢的にも十三才から十五才であれば体格によほどの差がない限り、相手に怪我をさせるような心配もないので、接近戦のための戦闘術も、シミュレーターを使った模擬空中戦も、学年には関係なしにぶつかりあう。希望と成績次第では、士官学校初年度の専門講座や、車輛やコンピュータなどの課外実習の受講も許される。

予科に属する生徒は、身分証明書エノカードに組み込まれた単位票と教室配置とを常に校内のあちこちに置かれた端末を使って確認しながら、自分が取らなければならない単位を見つけ、その講義が行われる教室へと駆け込むことになる。

それと並行して、この予科では実際の軍務を知るためという理由で、年間最低三ヶ月の軍勤務が義務づけられている。

学生達は進級時に指定された通りに、従卒として軍務につく前々日には寮室を整頓し、担当教官に申告の上で命じられた部隊の本部へと出頭しなければならない。

受け入れ先には前任従卒がいて、初年度はその指示にしたがってあらゆる雑用をこなすのだ。言われるままに駆け回る一年目、おろおろと立ちつくす新人を叱咤し、最初の年に自分が得た知識を申し送りする二年目があつて、三度目に配置されると晴れてその部隊の指揮官クラスに個人的に仕えることが許される。

もつとも、学生の中でも卒業後すぐに士官候補生となる上級貴族出身の者たちにはこの任官義務はない。彼らに必要な知識はいかに堂々と部下の敬礼を受けるかと、閱兵式でのマナー、それに軍の組織図といったところが主であり、模擬空戦も回数をこなさえすれば、対戦成績などは考課に影響しないのである。

あるものは成績を気にしながら必死で働き、ある者は身分や財産という生まれ持ったアドバンテージを背景にゆとりある学生生活を謳歌する。首都星オーデインの幼年学校はまるで卒業後の社会の縮図そのものだった。

幼年学校の寮生達が授業や訓練を受ける以外の時間を過ごす場所は、大きく分けて三カ所しかない。ホールと呼ばれる大食堂と自習室、それにいくつものソファやテーブルが置かれた談話室である。この談話室だけが教師陣からの直接の管理を受けずに、学生同士の自治が認められた唯一の自由空間なのだった。むしろ大貴族出身の寮生たちは

このような場所を利用することはない。彼らには彼らだけの特別な応接室と、格段に広い個室が与えられているから、ここ談話室を利用するのはもっぱら、爵位には縁のない平民から選ばれたものたちか、貴族と言っても嗣子ではなく、いずれは他家への養子縁組をするか、捨て扶持をもらって長兄の庇護下に暮らすしかない次男、三男といった学生ばかりである。

それでもきつぱりと二つのグループに分かれているところが、面白いといえば言えるのだったが。

いま、大型の窓に近く、より居心地のよいソファや丸テーブルを囲む一角に陣取っているのは、そういった貴族の子弟たち……、そして彼らのそばに侍り、おもねって知遇を得ることで将来的に何らかの優位性を得たいと望む平民出身の学生たちだった。彼らは決して自分のものにはならないとしても、一族が所持する広大な莊園や別荘行きや、貴族社会ならではの社交行事の予定について、まるで自慢するように声高に語りあっていた。

そして……、そんなグループが集まる一角とは別に、もう少し地味な会話を交わす今一つのグループ……。その中心に、二人はいた。

周囲に集まっているのは、平民と貴族とを問わず、自らの力に恃むところのある、親の身分にかかわらず軍での位階を駆け上がることができると信じている生徒たちだった。

「なあ、お前ら休暇中はどうするんだ？ やっぱ別荘とか……」

ラインハルト・フォン・ミューゼルとジークフリード・キルヒアイスという、予科でもトップの成績を誇る二人にそう訊ねたのは、彼らに次いで良い成績を誇る民間医の息子だった。

「別荘？ そんなもの」

あるわけないだろ、とラインハルトが吐き捨てた。

「だって貴族、だろう？」

「爵位を持てば誰もが金持ちっていうわけじゃない。それにうちは貴族と言っても単なる帝国騎士だからな。支配する領地があるわけでもないし」

「そういうものなのか？ でも俺の母親は結婚する前は帝国騎士の家でメイド頭をしていたらしいけど……」

「すごく」

「だから、同じ騎士の階級でも資産の多寡はそれぞれということさ、うちのなんて……」

「じゃあ夏休暇はどうするんだ？」

別の一人が訊ねた。

「軍務当番には当たらないかな？ たんたろう？ 家に帰るのか？」

家に帰るのかと問われたラインハルトの形のよい眉が不快そうにひそめられ、整った鼻先に微妙なしわが寄る。

「そのつもりはない」

「ふーん帰らないんだ」